

三觀 左 目

平成元年 8月

第 11 号

年 2 回発行

編集発行

小出真行



恶心は迷いのもと

善心はさとりに至る道である

万灯会願文

としとれば (四)

聞きたがる
死にともながる
さびしがる

心はまがる
欲ふかくなる

仙崖・老人六歌仙



私たち人間という動物は、とかく年をとるにつれて、人の話が気になりがちですぐ聞き耳をたてたりしますし、当然死にたくもなですし、ふと心を落ち着かせて物想いにふけつていると、自分という存在が虚しく感じることもあります。そして、人の真意がくみとれず、欲が深くなるのも全て物事に対しても執着が深くなつたということなのです。あまり物事に執われずゆつたりとした心を持ち続けたいものです。



正觀寺 秋季大祭

水子地蔵と水子観音



御本尊とは、各宗派の主旨における教えによるものや、信仰心を持つ動機などによって救つて下さる中心的な如来や菩薩などをさします。

では、水子供養の場合はどうちらかと申しますと、御本尊を選ばれた理由は、後者つまり信仰心を持つ動機になります。この場合の御本尊としては圧倒的に多い仏様が「お地蔵さま」と「観音さま」です。いずれも「水子地蔵」「水子観音」と呼ばれて、いずれも菩薩と称している点に注目して下さい。

菩薩の意味を解りやすく申しますと「仏としての悟りを開く直前に位置しているもの」

となるでしょう。しかし、それを「未だ悟つていらない存在」というように受け取つてしまつたのではあまりになきれない気がします。

菩薩ということには理由があります。それは、全ての人々を救わなければならぬといふ誓いでして、その誓いが完成したとき、はじめて仏（如來）になられるのです。いいかえれば、六道を輪廻し（六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天）迷い続いている罪

深い私達がいる限り、菩薩は悟りたくても悟れないお立場にあると理解してもいいでしょう。

ところで、皆様もお気付きのことと思いまつのように小さく巻いておられます。菩薩像の頭髪は束ねて垂らした垂髪です。観世音菩薩はちゃんとこのお姿ですが、地蔵菩薩はきれいに頭髪をくるりと剃りあげられた丸坊主です。これは、比丘形（お坊さん）といつて、実際に菩薩でありながら人間の世界にまで降りてくださるのです。菩薩という尊いお方でありながら、お地蔵さまは、よだれかけを着けたりして、あたかもわたしたちの同類であるかのように心やすく接しておられるのはこのためだといえましょう。

この地蔵菩薩の最大のお役目は、お釈迦さまがお隠れになつてから五十六億七千万年後に弥勒菩薩が次の仏として、この世に現れておいでになるまでの「無仏の時代」に、六道で迷い苦しむものを救うことです。このことについて、十輪經というお経の中にお釈迦

さまから依頼されたと、記されています。お地蔵さまの誓いは、地獄のような「悪趣」を住み家として、苦しんでいる罪人を友としておられるのは、その行動を表わしているものと考えていいでしょう。こうした、お地蔵さまですから、わが国では熱っぽい歓迎を受けており、とりわけ、宗教的な自覚もないまま幼くして往つた稚子（水子）に対してはお地蔵さまにおすがりする以外はないといった切実感があります。

皆様がよく知つておられます「地蔵和讃」によりますと、塞の河原といふいわばこの世とあの世の中間的な世界で、稚子が両親を恋しがり、両親のために小石を拾つて積み上げ幼児なりに造仏、造塔の徳を積もうとしていると、鬼が現われて無情に鉄棒でくずしてしまいますが、そこへお地蔵さまが現われてその衣の袖に稚子を隠して守つてくださるというのです。

ですから、「水子地蔵」の回りに嬰児が群がつておられるお姿は、この伝統的情景を表わしたものでしよう。

少し話しさは変りますが、この「水子地蔵」に対して「水子観音」を本尊とするのは、日

蓮系の寺院に多いようです。それは、宗旨が「法華經」を唯一の經典とするからです。俗に「觀音經」といって「般若心經」と同様に、よく一般に誦まれておる經があります。このお經は本来、独立した經典ではなく「法華經」

の一部（第二十五章目の普門品）なのです。では、その内容に少し述べてみると「觀世音菩薩はどんな因縁からその御名を得られたか」という無尽意菩薩（仏の説法を聞く聴衆の代表）の問い合わせ、お釈迦さまは、「無量百千億（たくさん）の衆生があつて、諸々の苦惱を受けるとき、觀音の名を一心にとなえれば、觀世音菩薩は直ちにそのこえを観じて救うてくださる」と答え、私達の外から襲つてくる災難、内にある三毒も避けることが出来ると説かれているのです。そして「三十三身十九説法」つまり觀世音菩薩は相手に応じて無数に化身し、時間と空間を超越して説法することを示しており、私たち衆生のあらゆる恐怖を和らげ、とり除いてくれるとあります。最後の「世尊偈」といわれる韻文は各行五言一句からなる詩によつて教えが再度、格示視の神通力の教えを聞いた者は必ず功德を得るであろう」とのお釈迦さまの問い合わせに対し

て、觀世音菩薩の絶対の慈悲と衆生の諸願満足に心をうたれつつ。

「これを聞いた八万四千の衆生は仏と同じ無上の菩提心を起こす」と応答したのです。

つまり「觀音經」は誰にでもわかる表現を用いて、觀世音菩薩が現世的な苦しみや災難をとり除き幸福をもたらしてくれることを約束しながら、いつの間にか佛教の深いさとりの境地に導いてくれる、きわめて明快な力強いお經であります。

話はもとにかえりますが、觀世音菩薩も地藏菩薩同様、わが国において熱っぽく歓迎された菩薩さまです。とりわけ仏像彫刻の世界におかれましても、エース的な存在です。この「觀音信仰」も伝統的に定着しておりまして、例えば五月に巡拝いたしました、西国十三觀音靈場、その他秩父三十四觀音靈場等たくさんあります。觀世音菩薩は字義の通り世の音を観ずるお方で、この世の音とは、わたし達が救いを求める声にはかりません。慈悲の眼をもつて苦しみという苦しみをくまなく観とどけ、超越的な力でもつて救わずにほかないという誓いがあるのです。

つまり、いずれの世界をも見抜き見通し、

その声を聞きとどけ、ただちに救いの手を差し向けるというのです。そうした一切の苦しみの救済主としてのお働きに加えて、あの女性的な、いかにも母性のやさしさを思わせるお姿が「水子」に対して、何より救済を思わせられるのでしょうかね。



「地獄極樂裏表」といつたことわざがありますが、この意味は、地獄と極楽とは全く反対で遠くかけ離れているように思われがちですが、それは一枚の硬貨の裏表のようなものなのですよ、と言つてゐるのです。

例えば、こういう話があります。

あの世には、地獄湯と極楽湯が隣どうしに並んで丁度錢湯の男湯と女湯のように、大きさも設備も何から何まで同じで、おまけに入っている人数も同じとしましよう。

地獄湯の方をのぞくと喧嘩をめぐらして喧嘩がかかるとか、肘で突かれたとか……。そんな争いが絶えなくまさに地獄の光景です。ところが、もう一つの極楽湯の方はどう

かというと、こちらは静かそのものでまさに極楽気分なのです。不思議な事に地獄湯と同じ大きさで同じ人数の人がいるのに和気あいあいと入浴を楽しんでいるのです。

何故かわかりますか。

それというのも極楽湯では皆さんにお互いの背中をまるく輪になつて洗つているのです。ですからお互いの肘がぶつかりあうことなく、狭い所でも仲良くやつていけるのです。つまり、極楽も地獄もお互いの心の持ちようだということなのです。

お互いの背中を洗うということは、もしもたら自分の心を洗うということなのかもわからせんね。

お 互 い に



私たちの身体にしても、衣類にしても、もし洗うことをしなければ汗と埃で垢まみれで汚れがしみ込んでしまいにするることは出来なくなるでしょう。ですから、そうならないためにも、入浴しては身体を洗い、衣類も特に肌着などは毎日取り替えて洗濯するはずです。部屋や庭も同じ事で、常に小まめに掃除すればいつもきれいで気持よく暮らせます。目

には直に見えないだけになかなか気がつきませんが、この掃除や洗濯をおろそかにしていませんと、汚れやしみや埃がたまつて見るのも嫌になります。そういえば、私が高野山に居た時に、奈良県の天理市（天理教の本部）に行つた時、老若男女と問わず町の人達が一

生懸命に道路をきれいに掃除されており、びっくりしたことがありました。特に便所は隅々までよく掃除が行き届き驚くことしきりです。（やはりこの様にきれいに町全体が掃除してありますと、お参りに来られた方もさぞ

かし気持のいいことだらうと思います。私も今のお坊を少しづづきれいにしていかないと

いけないと深く反省させられます。）玄関と便所がきれいに掃除されている家は、何かと心配りがあるはずですが、皆さんの家はどうですか。

さて、それでは心の汚れについて少し考えてみましょう。私たち人間の心の中には、どんな人でも「貪・瞋・痴」の三毒があります。「貪」とは、貪りの心で、つまり様々な欲望のことですから、お金持ちになりたいとか、立派な家が欲しいとか、いい車が欲しいとか、出世したいとか、おいしい物を食べたいとか、それに性欲、睡眠欲などがこの「貪」なので

「瞋」とは、つまらないことにすぐ腹を立てて、いつもイライラ、ギスギスした心の有り方です。

「痴」とは、愚痴のことで、物事の是非や善惡がわからず、正しい判断の出来ない愚かさをいいます。

この三毒を煩惱ともいいます。これが、心の汚れであり、しみなのです。こうした煩惱を正しくコントロールしていくには、文明の利器の発明となり、私たちの生活のレベルを向上してますが、誤ると、傷害沙汰や殺人事件にもおよぶ大それた犯罪に直接結びつくことが今古東西たくさんあります。

しかし、人間である以上、煩惱のない者は誰一人もありませんし、お互いに「感情」と「勘定」の動物ですから、大小様々な誤ちを過さずには生きて行けません。反面、人間であればこそ、誰もが良識や良心を必ず心の奥に秘めているのです。これが「仏心」なのです。この「仏心」によって、よこしまな心を思ひ止どまらせ、はやまつた行動を阻止しますので、「自制心」とも言えるのでしょうか。相手の気持、相手の立場に立つて物事を判断出来る「心」を養いたいのですね。その心が「まわりまわって」幸福をもたらすものだと信じて止みません。